WIDE COLOUR

ラボーチキン
La7戦闘機

☆特集☆
デビスモンサン空軍基地のA-10とU-2
将来戦闘機におけるDLCとDSF
建国200年で復元されたウォーホーク

'76 10
OCTOBER

BUNRIN-DO JAPAN

$3.30

デビス・モンサン基地の
A-10

A-10s at Davis-Mont

(Photo by Frank

デビス・モンサン空軍基地の第355戦術戦闘連隊(355th TFW)第333戦術戦闘訓練飛行隊(333rd TFTS)所属のA-10A．機体はグレイ一色で塗装され，胴体と尾翼のマーク以外の注意書きなどは，すべて黒で記入されている．

The A-10A aircraft at Davis-Monthan AFB are assigned to the 333rd TFTS of the 355th TFW. Painted gray overall.

(Photo by Frank B. Mormillo)

Photo by Frank B. Mormillo

RESCUE

DM

AF 50 260

(Photo by Frank B. Mormillo)

Photo by Frank B. Mormillo

Assigned similarly to the 333rd TFTS, or 355th TFW, these A-10s are painted in patterns of gray [illegible].

航空自衛隊の T-34練習機

JSDF'S T-34 TRAINER

このページと右ページ上は，静岡県にある航空自衛隊静浜基地の，第11飛行教育団で使用しているT-34A "はつかぜ" 練習機。右ページ下は，岐阜基地の実験航空団で使用しているT-34A。

T-34A "Hatsukaze" trainer, based at Shizuhama, Shizuoka Pref 11th FT Wg. Right below T-34A in use by Air Proving Wing, Gifu AB.

372
51-0357

(Photo by Frank B. Mormillo)

デビス・モンサン基地のU-2

U-2, Davis-Monthan

デビス・モンサン空軍基地にある，第100戦略偵察連隊（100th SRW），第349戦略偵察飛行隊（349th SRS）所属のU-2偵察機。前ページの機体はグレイの濃淡迷彩になっていて，高空の大気の調査に使用されている。このページの機体は全面黒一色に塗装され，戦略偵察に使用されているが，機首が長く改造されている。

U-2 belonging to 100th SRW, Davis Monthan. The 349th SRS' U-2, painted in gray, is used for inner space air survey. The aircraft on this page, black overall, is for strategic reconnaissance.

(Photo by Frank B. Mormillo)

(Photo by Frank B. Mormillo)

このページ上，着陸するグレイ迷彩のU-2。
Gray-camouflaged U-2 about to land.

(Photo by Frank B. Mormillo)

U.S. Bicentennial Painted Birds

(Photo by Inter-Air Press)

(Photo by Inter-Air Press)

アメリカ建国200年記念塗装の翼たち

△▷イギリスのアッパーヘイホード基地駐留の第20戦術戦闘連隊（20th TFW）所属のF-111E。
▽ニュージャージー州航空隊所属のF-105B。
△F-111E of 20th TFW, a unique shot at the USAF Bicentennial display at RAF Upper Heyford,
▽F-105B of New Jersey ANG

(Photo by Dave Ostrowski)

(Photo by S.W. Daniels)

△フィリピンのキュビーポイント海軍基地における，空母ミッドウェー所属第161戦闘飛行隊（VF-161）のF-4N。

△F-4N of VF-161, USS Midway CVA 41, Cubi Point NS, philippines.

▽空母ミッドウェーを離艦する，第151戦闘飛行隊（VF-151）所属のF-4N。

▽F-4N of VF-151, USS Midway

(Photo by [illegible])

△厚木基地に着陸する，空母ミッドウェー所属第93攻撃飛行隊（VA-93）のA-7A。
△A-7A of VA-93, USS Midway. Photo taken at Atsugi NAS.

▽沖縄の嘉手納基地をタキシングする，海兵第232戦闘飛行隊（VMFA-232）所属のF-4J。
▽F-4J of VMFA-232, Kadena AB, Okinawa

(Photo by M. Hara)

(Photo by H. Hamano)

嘉手納基地に飛来したT-38A
T-38A flyover at Kadena AB

このページは，沖縄の嘉手納基地に着陸するT-38A。この機体は，ネリス基地所属のものと思われるが，F-4の空戦訓練に使用するために飛来したようである。
The T-38A, probably assigned to Nellis AFB, now arrives at Kadana AB to help the F-4 tactical practice.

(Photo by H. Hamano)

(Photo by Frank B. Mermillo)

△アートページで紹介した，グレイ迷彩を施したルーク基地のTF-15A。

▽グレイの濃淡による迷彩塗装を施した，ドイツ空軍所属のF-4F。

▽Luftwaffe F-4F in two-tone gray camouflage

(Photo by F.B. Mormillo)

識別評価塗装をしたイーグル

F-15 Eagle for visibility tests

(Photo by F.B. Mormillo)

(Photo by F.B. Mormillo)

ルーク空軍基地の第58戦術戦闘訓練連隊（58thTFTW）第555戦術戦闘訓練飛行隊（555th TFTS）に所属するF-15の中に、海軍のF-14と同様、グレイの濃淡による識別評価塗装をした機体がある。前ページとこのページ、および次のページの写真がそれだが、操縦席直下の胴体下面にダークグレイの塗装がされている。これは操縦席の平面形が描かれているもので、戦闘中、敵機から見て、この機体が飛行姿勢なのか、反転しているのか見わけがつかないという効果をねらったものである。

Interest are F-15s of the 555th TFTS, 58th TFTW, Luke AFB, that had the same type of gray pattern camouflage as the special F-14s at NAS Miramar. Note the very dark gray paint panel on the bottom directly below the cockpit. This is painted in the same outline as the cockpit and, in combat, is intended to confuse the enemy as to whether the aircraft is flying level or inverted.

(Photo; by F.B. Mormillo)

米海軍向け艦上多目的機
ロッキードUS-3A

Lockheed US-3A, New Navy Transport

ロッキード・カリフォルニア社は米海軍の要請で，空母と陸上基地間の輸送用多目的機の開発に当っていたが，試作1号機が完成，このほどテスト・フライトが行われた。この機体はS-3Aの改造型で，乗客6名と貨物4,600ポンド，貨物のみで7,500ポンドの輸送が可能。両翼下のポッドには，各1,000ポンドの貨物が積載できる。同機は耐空性，飛行性能試験ののち8月末に海軍に引渡される。

Lockheed US-3A prototype, passenger and cargo derivative of the S-3A Viking anti-sub warfare aircraft, made its first flight recently at Lockheed-California facility. This is designed to carry a crew of two and mixed load of six passengers plus 4,600 ld of cargo, or an allcargo load of 7,500 ld. It will be delivered to the Navy late in August.

速度，高度の世界記録を打ち立てた

ロッキードSR-71

Record-built Lockheed SR-71

マッハ3以上の超音速偵察機として知られるSR-71が，このほど世界最高の速度と高度記録を打ちたてた。米戦略航空団所属の同機は，米国西部上空の規定コース上を超音速で飛行，1,000m周回コースで3,356km/hの平均速度を達成した。高度記録は26,212m。写真は世界新記録を立てたSR-71A。

The Lockheed SR-71A has recently established two world records in speed and altitude. During the recent flight in the West, the SAC plane flew the regular course at an average speed of 3,356km/h. The altitude reached as high as 26,212 meters.

New Soviet Carrier KIEV in the Mediterranean

(UPI)

ソ連地中海艦隊に編入された空母“キエフ”

最近ソ連の地中海艦隊に，ソ連海軍初の航空母艦“キエフ”が配置された模様である。同艦は，VSTOL機YAK-36ジェット戦闘機とKA-25対潜ヘリコプターを搭載している。写真上は，黒海からボスポラス海峡を通過して地中海に姿を見せた“キエフ”。マルタに駐留するイギリス空軍203スコードロンのニムロッド機が撮影したもの。左はイギリス空軍第13スコードロンのキャンベラ機が撮影したもので，甲板上にミサイルのケースが見える。

It appears that the new Soviet aircraft carrier Kiev has been assigned to the Mediterranean Fleet. Recently, the RAF Nimrod from the 203rd Sq based in Malta caught the ship after she had passed through the Bosphorus from the Black Sea. Another RAF plan also took the photo of the ship on which missile cases are seen.

日本本土に接近するソ連対潜機

Soviet military aircraft active near Japan mainland

沖縄の第207飛行隊のF-104Jが，九州北方の日本海上で撮影した，ソ連の対潜哨戒機イリューシンIℓ-38“メイ”。同機はIℓ-18旅客機を対潜機に発展させたもので，胴体を延長して，機首下面にレドームを装備，尾部にMAD（磁気探知装置）を積んでいる。現在ソ連の海軍航空部隊主力陸上対潜哨戒機である。

This is the Soviet anti-submarine patrol aircraft Ilyushin Il-38 "May" which the F-104 of the Okinawa-based JASDF 207 Sq photographed, when she passed through the Japan Sea, north of Kyushu. The Il-38, equipped with MAD on the tail, is known as the mainstay ground-based anti-submarine aircraft of the Soviet Navy.

フランス空軍のDC-8

French AF's DC-8

去る7月29日　大阪国際空港に飛来した，フランス空軍のDC-8。同機はフランスの首相，外相ら一行を乗せて来日したもの。

(Photo by H. Hamano)

On July 29, this French Air Force' DC-8 arrived at Osaka International Airport, Japan, with the French Prime Minister and Foreign Minister aboard.

航空自衛隊静浜基地 第11飛行教育団

JSDF 11th FT Wg, Shizuhama.

静岡県にある航空自衛隊静浜基地には，第11飛行教育団があり，山口県の防府基地にある第12飛行教育団と共に，航空学生の第一初級操縦課の訓練を行なっている。ここではT-34A"はつかぜ"を使用し，基本的な空中操作の教育を受け，この課程を無事卒業すると，芦屋基地のT-1によるジェット機の操縦課程へと進んで行く。この第一初級操縦課程では，最初40日間ほど機体，無線などについての地上教育を70時間受け，それが終ると，実機による空中操作を行なう。そして14時間ほどでソロ(単独)飛行の許可がでると，初めて一人で飛行できるのである。この空中操作では，航法，編隊，計器飛行などを身につける。そして，この課程を7ヵ月で終え，次のジェット操縦課程へと進んで行く。

The 11th FT Wg at Shizuhama is in charge of the primary flight training. Those graduated from this course with the T-34 (7 months) will come to the 18th FT Wg at Ashiya, Kyushu, to get the advance course of flight with the T-1.

左ページ上は離陸するT-34A。下は機に搭乗する学生。このページは訓練を終えて着陸したT-34"はつかぜ"。現在ここの教官は22名。学生は天候が良ければ，一人一日1時間の飛行訓練を行なっている。また，T-34Aのエンジン始動スイッチは前席だけにしかなく，このため学生は，最初の飛行訓練から前席に乗る。飛行訓練は，静岡，沼津，焼津，富士の上空および太平洋上で行なっている。

(Left page) - The 11th FT Wg has now 22 instructors. Students can get an hour flight training a day, if weather allows.

このページと右ページも，静浜基地のフライトラインのスナップ。この初級操縦課程に使用しているT-34Aも，来年からは性能向上型の富士KM-2Bに変わるということである。

(Right page) - Plans indicate that the T-34 will be replaced by the Fuji KM-2B, next year.

51-0375
375
51-0375

デビス・モンサン基地のA-10とU-2

A-10 & U-2 at Davis-Monthan

Photos by FRANK B. MORMILLO

アリゾナ州にあるデビス・モンサン空軍基地の，第355戦術戦闘連隊(355thTFW)第333戦術戦闘訓練飛行隊(333rd TFTS)には，現在6機のA-10が所属している。左ページとこのページは，その中でグレイの濃淡による迷彩塗装をした機体。このA-10の最終的な塗装は，まだきまっていないが，米空軍では，カムフラージュ効果があり，なおかつ，熱線ミサイルにも影響されない，低赤外線を発する塗装を考えているという。

The final color scheme for the A-10 has not been selected yet. The AF authority is trying to find a color scheme that will both camouflage the aircraft visually and give off a low infrared signature so that the aircraft will not attract heat seeking missiles.

このページと右ページは，グレイ一色で塗装されたA-10A。胴体側面に355thTFWのエンブレム，垂直尾翼に戦術空軍（TAC）のエンブレムを描いている。このエンブレムには色彩が多く使われているが，そのほかのテイルレターやシリアルナンバー，注意書きなどは，前記のカラー効果を考えてか，すべて黒で記入されている。

Except for the TAC emblem, the tail letter, serial number and other notes are written in black.

左ページとこのページは，第100戦略偵察連隊（100th SRW)第349戦略偵察飛行隊(349thSRS)所属のU-2。これは機体を黒一色の塗装した戦略偵察型と思われるが，機首が従来のものより長く改造されている。また，下の写真で，着陸するU-2を追いかけている自動車があるが，これはU-2が停止すると，すぐに翼端につける，アウトリッガー車輪を運んでいるものである。

Davis-Monthan based U-2s are assigned to the 11th Strategic Reconnaissance Wing. Note the automobile that chases landing U-2s down the runway. This carries the outrigger wheels for the U-2 wingtips.

上は前ページと同じ機体。中と下は，機体をグレイの濃淡でカムフラージュした，高空の大気調査飛行に使用されているU-2。

U-2 in use for inner space air survey.

PHOTO NEWS

日本の航空自衛隊FX調査団が、エドワーズ基地の米空軍飛行テスト・センターを訪門中、ゼネラル・ダイナミックス社と米空軍のテスト・パイロットが、F-16の性能を公表した。写真上と中は、7回行なわれたミッションのうち2回のミッションで、スパローミサイル2基とサイドワインダー2基を搭載して飛行するF-16戦闘機。下の写真は、このほどロッキード・ジョージア社で完成ロールアウトした、ジェットスターII長距離型ビジネス機。同機はガレット・リサーチ731-3型エンジンを4基装備して、米大陸を無着陸で横断することができる。

ソ連民間機の近況

このページは、さる6月25日にモスクワのドモデドボ空港で開かれた。ソ連新型民間機ショーの参加機。展示されたのは、Il-76輸送機〔中〕、空中撮影専用機An-30〔下〕などである。なお、An-30空中撮影専用機は、飛行中面積5,000km^{2}の土地を撮影でき、フィルム・カセット入れ替え用の暗室もそなえている。

(NOVOSTI PRESS)

(TASS)

(TASS)

(TASS)

(NOVOSTI PRESS)

上は、このほど新設された、モスクワ－マブト線に就航したアエロフロートのTu-154。中は、120人乗り旅客機ＹＡＫ-42。さる６月25日のドモデドボ空港のショーに展示されたものである。下は Iℓ-76大型ジェット輸送機。

(TASS)

(NOVOSTI PRESS)

スナップだより

アメリカ建国200年記念の塗装をした、岩国基地に駐留する第115戦闘飛行隊（VMFA-115）のF-4J（岩国市　三村淳一）。

このほど米国に売却された、元朝日新聞社で使用されていた「あさくも」号（調布市　桜井　隆）。

厚木基地に飛来した、第46対潜哨戒飛行隊（VP-46）のP-3B。胴体横に描かれている絵は、アメリカ建国200年記念のもの（Photo by S. Ohtaki）。

LAVOCHKIN La-5 & 7

① La-5FN ソ連空軍のエースV.I.ポプコフの乗機
Flown by V.I. Popkov, Poland, 1944.

② La-5FN モスクワのジャズ・バンド「陽気な男たち」からの献納機
Donated by Moscow Jazz-band "Veselyie Rebyata"

③ La-5FN 胴体に白帯を巻いた編隊長機
Standard scheme, formation leader's aircraft.

④ La-7 所属部隊不明
Unit unknown.

⑤ La-7 標準塗装機
Standard scheme.

●建国200年を記念して 復元されたP-40

←
NASM Director Michael Collins inspects the airplane. With him is Col Stewart Young, Commander of the 89th Military Airlift Wing, sponsors of the project.

アンドリュース空軍基地で復元が完了したP-40E。

〔上〕タイガー・シャークのマークを付けて，いまにも飛び立ちそう。

〔左〕ロールアウトしたP-40Eを視察する。かつてアポロ11の飛行士で現在国立航空宇宙博物館の館長であるミカエル・コリンズ氏（中央）と復元計画を後援した第89空輸連隊司令のスチュワート・ヤング大佐（右）。

〔右〕タイガー・シャークの口を画いた機首のクローズアップ。

(Photo: Robert C. Mikesh)

BICENTENNIAL WARHAWK

BICENTENNIAL WARHAWK

アメリカの建国 200 年を記念してワシントンD.C.に開館されることになった国立航空宇宙博物館新館の展示用に復元されたカーチスP-40Eウォーホーク。同機は貸与契約でカナダ空軍に装備された1機。大戦中は第3戦闘スコードロンに配備されて，アリューシャン方面で作戦している。戦後アメリカに返され，エアレースなどに使われていたもの。1963年に，スクラップ寸前のところを国立博物館のスタッフに救われ，今回の復元となった。復元はアンドリューズ空軍基地で行なわれ，空軍の整備のスタッフが全面的に協力した。

機体塗装は米義勇空軍“フライング・タイガー”の後継きとして1942年7月に編成された第23戦闘グループ第75戦闘スコードロン所属機のものにして仕上げられた。

◆建国200年を記念して復元された◆

P-40ウォーホーク

(Photos by R. D. Mikesh)

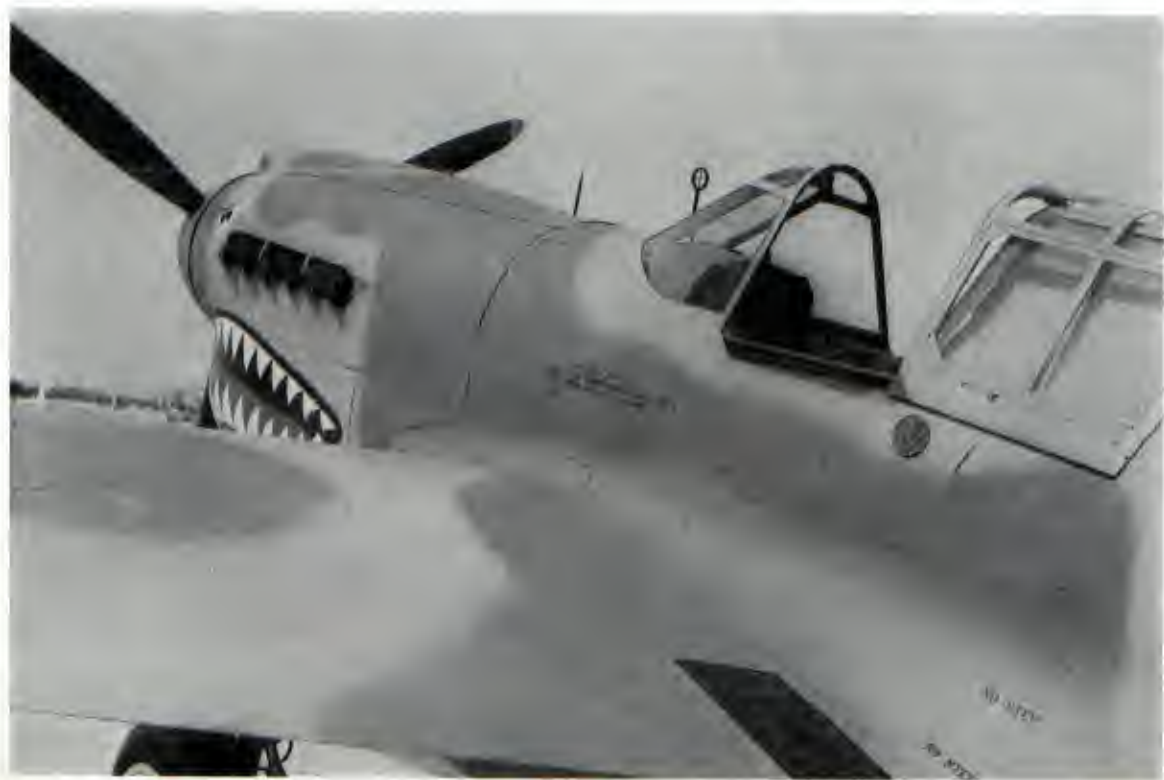
The final touch was the painting of the classic tigger shark teeth. Seen here is Staff Sergeant Wm. F. Brittin, discussing special details with Mark Clark.

↑ Painted to match an airplane assigned to the 23rd Fighter Group in China, successor to the AVG Flying Tiger Fighter Group.

→ Minus a reflex gunsight, the P-40 is otherwise relatively complete in all other details.

〔上〕復元が完了したP-40Eは，米義勇空軍フライング・タイガーの後継部隊として同じく中国で作戦した第23戦闘大隊所属機の塗装にして仕上げられた。

〔左〕機体塗装で，最後に書き込まれたのは機首のさめ口であった。マークの細部について打合わせをする復元作業のスタッフたち。

〔右〕操縦席まわりも，反射式の照準器は欠けているが，ほかは完ぺきの仕上り。風防前方の環状の照準器は主翼の6挺の12.7mm機銃の照準にも使えた。

アンドリューズ空軍基地で，約14ヵ月かかって復元されたP-40Eは，今年の2月下旬の快晴の日に"ロールアウト"した。ここに紹介する写真はそのロールアウト当日のもので，いまにも飛び立てそうな見事な仕上り。写真下は操縦席まわり。戦後しばらく飛行していたこともあって，コクピット内は計器板や操縦装置など細部まで比較的原型をたもっていたが，すべて分解して再整備された。

①

Wings of Mojave Air Races

(Photo by C.M. Daniels)

モハーベ・エア・レースの参加機

6月末にカリフォルニア州のモハーベ砂漠で行なわれた"モハーベ・エア・レース"の参加機，とくに色彩のゆたかなところを選んで掲載しました。①F-104のレーサー"レッド・バロン"，②建国200年にちなんでか，星条旗の星をあしらった「76」，③派手な赤のムスタング"キャンデイ・マン"号，④世界のトップ・エア・レーサー　グリーネマイアのベアキャット，⑤赤，白，ブルーの対比が美しいおなじみのムスタング"ミス・アメリカ"

②

③

④

⑤

〔上〕復元された機体と同じ塗装パターンのP-40E。就役当時のもの。P-40のE型は，開戦当時はすでに旧式であったが，陸軍空軍が保有する唯一の近代的な戦闘機であった。

〔下〕本機は博物館用に復元されたもので，飛行することはないが，飛行可能に近い出来あがりである。地上のこの姿は，まさに敵の空をにらんで待機中というところ。

〔右〕斜め後方より見たP-40E。開戦のころ陸軍空軍機は，水平尾翼にはシリアルを書かずに機体番号のみであった。

⬆ An inflight view of a P-40E having the same camouflage pattern as the museum's Warhawk.

➡ In the early war period, AF serial numbers were not prominently painted across the tail surfaces, only the unit assigned ship number.

⬇ The condition of this P-40 is close to being airworthy.

〔下〕カナダ空軍に装備されたと思われるP-40Eの塗装例を示す1機。この機体は，米陸軍空軍向けの生産途中からカナダ空軍に引渡されたものらしく，胴体の米軍機マークのほかに，尾翼に英空軍のフィン・フラッシュを付け，機体塗装は典型的な英空軍の砂漠迷彩である。

Note the typical British desert camouflage and RAF fin flash, with U.S. star insignia painted over the roundel.

作る楽しさを創る

レベルの仕上材

航空自衛隊F-4EJクローズアップ

〔上〕機首左側面のクローズアップ。「把手を引けば風防が射出する」といかにも軍隊調の日本語や「危険」の文字が記入されている。

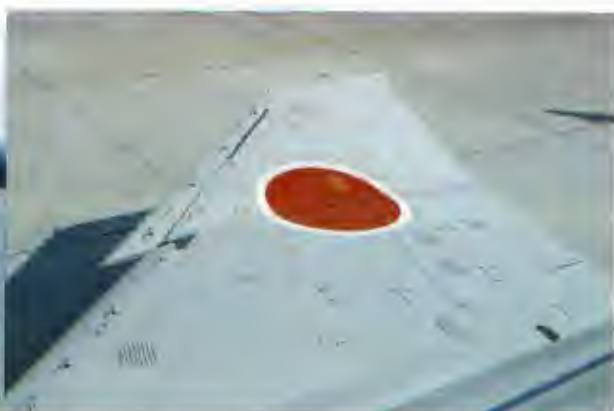
〔下〕主車輪カバーにはエンジン始動時に近づかぬよう注意書きがある。

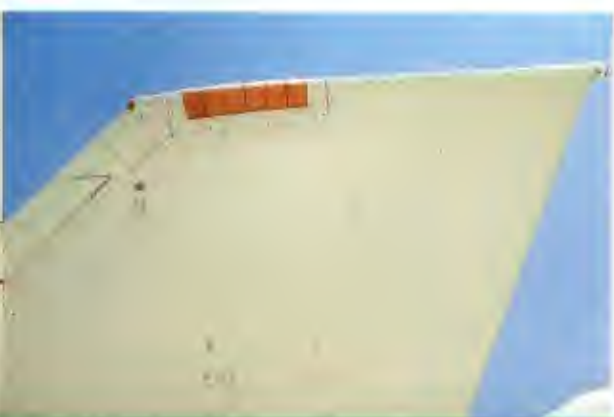
〔上〕機首右面の注意書きと前脚カバー。

〔下〕ドラッグシュートについての危険注意書きのある右軸尾部。

McDONNELL DOUGLAS F-4EJ PHANTOM II

1/32 SALE KIT

〔上〕機首右面のクローズアップ。注意書きはキャノピ射出用の爆薬を内蔵していることを示し、詳細はT.O.を参照せよとなっている。
〔下〕右翼下面の日の丸にある注意書き。

〔上〕右主翼上面で日本語による危険注意書きも追加されている。
〔下〕左主翼翼端部の詳細。

〔写真は©グンゼ産業㈱レベル部撮影〕

McDONNELL DOUGLAS

ハイモデリングのための
レベル資料集

航空自衛隊のF-4EJクローズアップ

F-4EJファントムIIの超デラックス1/32スケール・キットが新発売中で，デカールは航空自衛隊第2航空団第302飛行隊の尾白鷲のマークと，第7航空団第301飛行隊の非公式マーク（筑波山のガマガエル）のマーク2種のほかに，各種シリアル・ナンバーの組合せができるナンバーがある。

とくにこのデカールは，プラ・キット界はじまって以来の超ビッグサイズで，横37cm，縦26.3cmと本誌2ページ分よりすこし大きいビッグ・デカールなのは，まさに驚異的といえる。日本語と英文の極小注意書き文字もビッシリとプリントされており，機体の組立てもさることながら，このデカール貼りは相当の根気の入る仕事となる。マニュアル片手でも，ワッカルカナー，ワッカンネェダローナー。

しかしご心配はご無用。説明書の指定ナンバーどうりに貼ってゆけば，すべてOK。根気・根気，コンキヤデェーといったところである。

さてカンジンのキットのほうはというと，これはF-4EとかF型キットで，すでに定評のあるデラックス版。増槽から武装にいたるアクセサリー群が，翼下にゴッテリと完備するというキットで，ウルトラ・ビッグ・モデルの豪華版。この1機を作っただけで，デェーンと机上がいっぱいになる。

つづいて発表されるキットに，F-4JファントムII 1/32スケールがあり，これまたF-4Jのデカールを上まわる超大型サイズのデカール付き。アクセサリー群も，E・Fと同様で，海軍型の装備付きとなっている。

これまたデカールを見ると，どうしても作りたくなるモデル。机上はすでにF-4EJに占領されているが，さてドウスルゥ！

〈イラストと解説・橋本喜久男〉

〔写真上左〕 319の機体ナンバーの上に重なる注意書きの小文字はグレイで記入されている。

〔上右〕 機首下面からのクローズアップ。前脚やランデング・ライトの詳細がわかる。

〔右上左〕 胴体左側面の日の丸部で，日の丸の中にもグレイの注意書きがあり，キャノピの下にも日本語の危険表示がある。

〔右上右〕 右主脚を内側から見たもので，脚柱にまで注意書きがある。

〔右下左〕 主翼前縁付根付近の下面。「資格のない者は，酸素系統の整備を行なってはならない」と書いてある。

〔右下右〕 右胴体中央部と内側パイロンのクローズアップ。

〔写真は©グンゼ産業(株)レベル部撮影〕

F-4EJ PHANTOM

ハイモデリングのための
レベル資料集
57-8364
364

ソ連空軍の多用途戦闘機 ラボーチキンLa-5～7

LAVOCHIKIN LA-5～7

(82ページ記事参照)

La-5FN at Tri Duby, Sept. 1944.

〔前ページ〕スロバキア地方のトリタビ飛行場で作戦中のLa-5FN。ドイツ占領軍の後方を空から衝いて、大損害を与えた。〔上〕同じくスロバキアのドイツ軍攻撃のためにクロスノ飛行場で発進準備中のLa-5FN〔下〕空戦中に不時着したLa-5。プロペラがあめのように曲っている。

La-5 made a forced landing.

In-flight view of an La-5 of Czech Fighter Regiment.

yak-7 9とともに二次大戦のソ連空軍戦闘機を代表するラボーチキンLa-5 La-7戦闘機。打倒Bf109、Fw190をめざして、LaGG-3の液冷エンジンを空冷にかえて改造したのがLa-5 7で、この点日本陸軍の3式戦と5式戦のケースに似ているが、5式戦が大戦末期の登場で、活躍の機会が少なかったのにくらべ、スターリングラード攻防戦で初陣をかざったラボーチキン戦闘機では、数多くのエースたちが生まれている。二次大戦のソ連空軍戦闘機では、yak-7 9にスポットがあてられ、La-5 7はわき役的存在だったが、制空戦闘から爆撃機援護、地上攻撃と幅広い任務に使われたスラブ魂の権化(ごんげ)のようなそこ力の持主であった。

上：La-5の飛行中の写真は非常に珍らしいが、これはその1枚で、1945に入ってからの撮影。機首に矢印付きの赤い閃光マークをつけたチェコの航空連合部隊の所属機である。 下：1944年9月、トリタビ飛行場のLa-5FN。ちょうどこの月、チェコの戦闘機隊2個飛行隊が、ポーランドからこの地方へ母国救援に飛来した。

La-5FN operating from Tri Duby airfield.

La-7 at Balice airfield, near Krakow, Poland, April 1945.

La-5のエンジンを出力の高いエンジンに換装し、機首をすっきりと整形して性能の向上をねらったのがLa-7。1944年夏ころから第一線に投入された。

〔上〕La-7のプロフィル。La-5で機首の上部にのびていたスーパーチャージャーの空気取入口がのぞかれて、すっきりした外形となっているのがよくわかる。前面風防の上端には、バックミラーがとりつけられている。写真の機体は、1945年4月にポーランドのクラコー近郊にあるバリース飛行場で撮影したもので、第1チェコスロバキア戦闘機連隊の所属機。同連隊はちょうどこのころ、La-5FNに代えてLa-7を装備した。大戦も最終段階で、もはやドイツ空軍機を凌駕していたころである。

La-7 at Prague Technical Museum in Czechoslovakia.

〔上〕チェコの首都プラハにある技術博物館に保存されているLa-7。1944年6月1日にソ連で編成されたチェコの航空部隊、第1チェコ航空連合師団は、第1～3連隊より成り、第1連隊と第2連隊は戦闘機部隊で、La-5、La-7を装備。第3連隊は攻撃機部隊で、イリューシンIl-2を装備した。写真の機体も同戦闘機部隊で使われた1機で、現在でも良好な状態で保存されている。

〔左下・下〕La-7の複座練習型La-7UTI。複座練習型はLa-7の生産ラインにあるものを抽出して改造したもので、教官用の後席を設け、La-7の標準武装である機首の3門の20mm機関砲は1門に減らし、燃料タンクの容量も少なくなっている。またLa-7では、La-5で機首下方に付けていたエンジン滑油冷却器の空気取入れ口を胴体後方の主翼後縁付根付近に移しているが、La-7 UTIでは、写真のように、ふたたびLa-5と同じ位置にかえている。後方にそのまま教官席を追加したため、教官席は主翼後縁付根よりも後方の位置で、前方の視界は悪かった

La-7UTI two-seat trainer.

未発表海軍機写真集

ラバウルの１式陸攻

Type 1 Attack Bomber (G4M1).
A war correspondent took these photos at Rabaul, 1943.

ラバウルを基地に作戦する１式陸攻。昭和18年春ごろ同方面に派遣されていた特派員が撮影したものである。

〔上〕飛行中の１式陸攻11型。爆弾倉のカバーは、通常、写真のように取りはずしていた。手前にうつっているのは撮影者の乗った１式陸攻11型の「火星」11型エンジン(1,410hp/2,000m)の集合排気管で、このようにカウリングの上に２本出されていた。

〔下〕ラバウルのブナカナウ基地から出撃する第705航空隊の１式陸攻11型。垂直尾翼の白いタテ線は、第３中隊をあらわす。右手前に見える車は、日産の軍用７人乗りセダン（日産70）で、1939年～40年に生産された。

Mitsubishi G4M1. The magazine door was open usually. The feature of KASEI engine (1,410hp/2000m) is clearly seen.

The 705th Kokutai's G4M1, ready to start for a sortie, Rabaul. Three lines on the tail show that it belongs it belongs to the 3rd Chutai. A Nissan 7-seat sedan is at the right front.

The 705th Kokutai's G4M1. Three are from the 1st Chutai, and four others are from the 2nd Chutai.

ラバウル上空を帰投する第 705航空隊の1式陸攻11型。前方3機は1中隊、後方の4機は2中隊の所属機である。

Bombardments in formation by attack bombers overawed the sky of the South Pacific.

同じくラバウル上空を編隊飛行中の第 705空の1式陸攻11型。尾翼の数字は機体番号で、横線1本は2中隊をあらわす。中攻の編隊による爆撃行は、まさに空を圧するの感。

360

Return to Rabaul base after a mission. Smoke shows that this aircraft had a trouble on the left engine.

攻撃を終え、ラバウルへ帰投する1式陸攻11型。11型の尾部銃座の風防は扱いにくいので、尾端が切りとられている。この機体は左エンジンに被弾したらしく、煙を出している。胴体上と左右の銃座は全部開いて、射撃時の状態である。

Z2-313

Like the one on page 114, this aircraft had the rear tip of the tail turret cannopy off. The 705th moved to Tinian from Rabaul on 5 September 1943.

114 ページの写真と同じく、ラバウル上空を出撃する1式陸攻11型。ここの機体も、いずれも尾部銃座の風防後端部を取りはずしている。705空は昭和17年11月1日、三沢空を改称したもので、18年9月5日、兵力回復のためテニアンへ転進するまで、ラバウルを基地として活躍した。胴体の日の丸マークは、四角の白地に日の丸と白フチつき日の丸のものとがあった。

（73ページ記事参照）

アメリカで復元されたウォーホーク

アメリカ建国200年を記念して、ワシントンの航空宇宙博物館新館用に復元されたカーチスP-40E。ここの写真は、そのかつての勇姿と復元の経過を追ったもの。〔上〕カナダ空軍に装備されたキティホークの1機。復元されたP-40Eは、これと同じく、大戦中は同第111スコードロンの所属機であった。〔下〕カナダ空軍から払下げられた同機は、機体を赤と白に塗って、エア・レースなどに出場した。写真はそのころ同機で、1948年に撮影。

The museum's P-40 was declared surplus to Canadian needs in 1946. In 1948, it was owned by Ellis Meaker, Syracuse, N.Y.

↑ While in RCAF service, this moved to Alaska to stave off the advancing Japanese on the Aleutian Is.

↓ Here Frank Sommers prepares to remove the fuselage fuel tank from behind the seat.

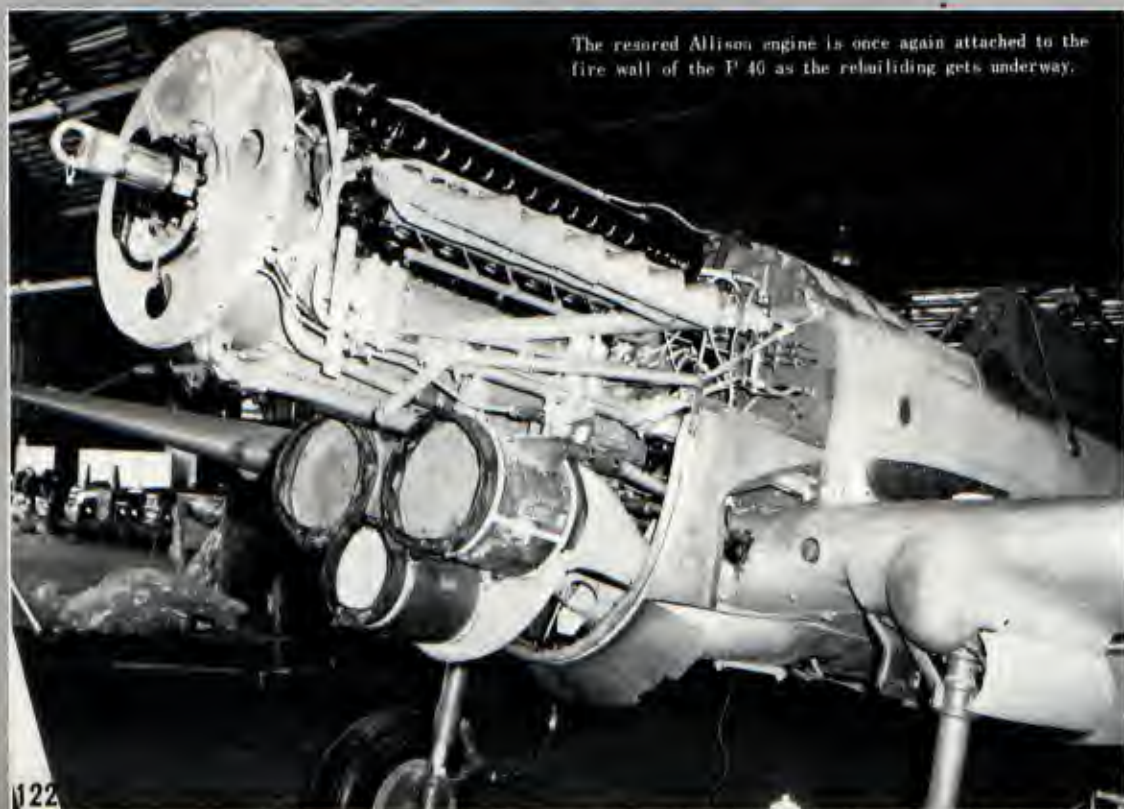
Airman James H. Smith makes a skin patch on the trailing edge of the P-40 wing.

⬇ Although its appearance seemed quite bad, the paint had protected its skin well from weather and corrosion.

〔左上〕スクランブルに
進する大戦中のカナダ空
キティホーク戦闘機隊。
元されたP-40Eは、これ
同じ戦闘機隊の1機とし
、アラスカ方面に派遣さ
、アリューシャンに進攻
る日本軍を迎え撃った。
〔左下〕復元作業は、ア
ドリューズ空軍基地で、
74年末から始められた。
体はこまかい部品まで取
はずして再整備された。
真は操縦席後方の胴体燃
タンクをはずすところ。
〔上〕復元を担当した整
員は、アンドリューズ基
のジェット機の整備のあ
まをみての作業。主翼の
縁のパッチを修理中。
〔下〕塗料のひきはがし
業中の主翼。機体の状態
非常に悪かったが、塗料
おかげで腐食はまぬがれ
。

The Warhawk began to take the shape of an airplane again.

〔上〕各部品の熱心な修復作業のかいあって，ようやく形をととのえたウォーホーク。復元作業にあたった整備員たちは、P-40は初めて見るという者が多かった。〔下〕きれいに復元された機首のアリソン・エンジン。

P-40EのV-1710-39エンジンは液冷V型12気筒で，出力は1,150hp。カウリングがはずされて，エンジンの下にたばねられた2個のグリコール冷却器と1個の滑油冷却器がよくわかる。

The resored Allison engine is once again attached to the fire wall of the P 40 as the rebuiliding gets underway.

Sikorsky S-42 Flying-boat

エアラインの翼

Pan Am's Planes

パン・アメリカン航空 ⑤

〔上〕1934年8月16日からパンナムの南米路線に就航したシコルスキS-42飛行艇。性能および機体設計とも、これまでのパンナム機にくらべると革新的ともいえるのがこのS-42。陸上機、水上機を含めて、これまでパンナムには実質的に100mph(160km/h)以上の巡航で飛べるエアライナーはなかったが、S-42は乗客32人を乗せた20トン近い巨体で、140mph(225km/h)の"高速"で飛んだ。航続力も大きく延びて約750マイル(1,206km)。これまで250マイル(402km)ほどの距離を飛ぶのに、乗客は搭載量の関係で荷物を制限されて、きゅうくつな席にすわらされたが、S-42で初めて豪華で快適な空の旅となった。同機は10機が生産され、初就航後8年間、南米の空に君臨した傑作飛行艇であった。

〔下〕メキシコに事務所を持つパンナムの子会社、アエロビアス・セントラルスが1933年に装備したノースロップ・デルタ。同機は11機が製作されている。

〔S-42データ〕エンジンP&Wホーネット(2,800ph)×4、全長21.03m、全幅35.97m、全備重量19,504kg、乗客数32、巡航速度225km/h、航続距離1,206km。

〔ノースロップ・デルタ　データ〕エンジンP&Wホーネット(755hp)×1、全長10.66m、全幅14.63m、全備重量3,175kg、乗客数8、巡航速度282km/h、航続距離1,550km。

Northrop Delta

ジェット戦闘機の先輩たち アメリカ海軍 ⑩

CHANE VOUGHT F6U PIRATE チャンスボート F6U パイレーツ

大戦中にコルセアをものしたチャンスボートが、初めて造った艦上ジェット戦闘機がＦ６Ｕパイレーツ。３機造られた原型ＸＦ６Ｕ-１の１号機は、終戦翌年の1946年10月２日に初飛行した。原型３機につづいて、生産型のＦ６Ｕ-１が30機造られ、1949年７月から翌50年２月までに海軍に引渡されている。

〔上〕飛行テスト中の原型１号機（シリアル33532）。〔右・下〕同じくテスト中の原型２号機（シリアル33533）。

原型のＸＦ６Ｕ－１は、ウェスチングハウスＪ－34－ＷＥ－22ターボジェット・エンジン（推力3,000lb・1,360kg）１基を装備。両主翼付根に空気取入口を設計。尾部コーンの下方から排出した。

〔上・右・下〕ＸＦ６Ｕ－1原型の３号機（シリアル33534）。前ページの原型１、２号機にくらべると、垂直尾翼の形が大幅に改造されている。また、２号機では、水平尾翼付根の前後に円錐状の出っぱりが見られるが、これは空気流の乱れを防ぐ、整流効果をねらったものと思われる。尾部にジェット・エンジンの排気口が開口することになって、垂直尾翼の取付位置には苦心しているのがよくわかる。

原型のＸＦ６Ｕ-１には、のちにJ34-WE-22を換装してソーラー・アフタバーナをつけてテストした。このため尾翼はやや延長されている。アフターバーナ付でテストした結果、推力は4,200-lb（1,905kg）にも達し、生産型にはそのままのエンジンを採用することになった。下の写真は飛行テストに発進するところ。初期のジェット機特有のずんぐりとした胴体である。